

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話 (043) 485-1801

女の強さ ----- 板井 省司 ある仲間 ----- 今井 章文
サークル活動奮戦記 ----- 林 和義 イカ、タコ ----- 加藤 克俊

壁は絆の証

坂本初男

市民カレッジでの体験に基づき、壁というものについて考えてみました。

私は現在市民カレッジの4年生で情報コースを専攻しています。市民カレッジは最初の2年間は50名ずつの2クラスに分かれて勉強します。同じクラスの仲間は週1回の授業の他に、懇親会、旅行、サークル活動等で行動を共にすることになります。

文化祭や運動会の時は、放課後も踊りの練習や応援の練習で盛り上がり、本番では更に盛り上がります。2年生の時の運動会では念願かなって優勝することができ、その後の祝勝会ではお互いの健闘を讃え合い、全員で勝利の喜びを分かち合いました。

このようにして同じ仲間と2年間を共にするため、知らぬ間に、強い絆と仲間意識が形成されていきます。

3年生になると1、2年生の時のクラスはばらばらになり、4つの専攻コースに分かれます。最初に役員選出と班編成を行います。何となく旧1組と旧2組に分かれてしまい、その後も別々に行動することが多かったような気がします。何かを決めようとしてもなかなか意見が噛み合いませんでした。

何か大きな壁が存在している感じがしました。他のコースでも大なり小なり同じような現象があったようです。

壁とは何だろう。壁といえば、東西冷戦の象徴であったベルリンの壁や会社内の部門間の壁等が思い浮かびます。

同じ目標や行動規範の中で、常時、行動を共にしていると、集団への帰属意識や絆が自然に生まれ、居心地の良いい場となります。その結果、そこから外には出たくない、

外からも入って来て欲しくない、という思いが形成されていきます。それが壁と考えられます。

そう考えると旧1組と旧2組の間に壁が存在するのは自然なこと、過去2年間それぞれが築き上げた絆の証であると考えられます。

情報コースで共に行動するようになってから、1年余りが経過しました。その間、自主勉強会や運動会、文化祭、懇親会等を通して、古い壁は徐々になくなり、新たな絆が芽生えてきた感じがします。

ベルリンの壁も崩壊しましたし、会社の部門間の壁もない方が業務能率も社風も良くなります。やはり壁はない方が良いでしょう。

市民カレッジの生活も残りわずかになりましたが、仲良く楽しく過ごすことで、壁はないが絆は固いという関係を築いていければと思っています。

(編集委員)

女の強さ

志津コミセンの囲碁仲間ら9名と群馬県草津温泉へ初めての親睦旅行に出かけた。費用はホテル代1泊2食付、往復のバス代込みで5500円と格安。皆が年金生活者であり一人でも多くの人の参加を望んだ旅である。

私は数十年振りでの草津温泉旅行であり、湯畑の見学や手打ちそばなどを満喫した。

ホテルの食事はバイキング料理のため客でこった返していた。同じテーブルにいた60歳台と思しき3名の女性グループに何とはなしに声をかけてみた。「皆さんのご主人は、今頃何を食べているの」と尋ねると、一斉に「もう、亡くなったの」と言う。私は余計なことを聞いてしまったと言葉に詰まって、「それにしても、皆さんお元気そうですね」と言うと、「主人を送り出したら、肩の

荷が軽くなったみたい」と言う。

私が「妻よりは先に逝きたい。後に残りたくない」と言うと、彼女達は「そうね。男の人が取り残されると惨めね」と。そして返す言葉で、私のトレーに載っている料理の量を見て、「男の人がそれで足りませんか」と言う。彼女達のトレーには私よりはるかに沢山の料理がぎっしりと盛られているのだ。

よく言われることは、男は妻に先立たれると、2、3年もしないうちに後を追うように逝くケースが多いということだ。えらそうなことを言っ

て強ぶっているわりには男は弱くてもろいものである。女性性は現実的であり、都合の悪いことは上書き保存できないに忘れ去る。その点男の方が女々しいのである。女性が男性よりも長生きできるよ

うに神様がバイタリティを組みこんだのであろうか。
(ユーカリが丘 板井 省司)

ある仲間

もうかれこれ50年近くなる。学生時代の仲間との付き合いである。10代に知り合い、これまでよく続いているものと感心するばかり。家内共々の旅行会も今年で10年目となり、これもよく続いているものと感心。

きっかけは、世間でよくみられるとおり、男同士の飲み会が発端である。9年前の春、いつものメンバーでの飲み会時、「我々の誰かの葬儀の時残されたカミさんは我々を誰も知らないが、これは如何なものか」との声が上がり、たわいのない議論の後、「そうだ、一緒に旅行をしよう」ということになった。酔った勢いで、行き先は海外、国内の順にし、今年海外の某国、時期は〇頃と決定。今では考えられないが、勿論カミさん不在の決議である。私の家内は事情もあり、3回目からの

参加であるが、当初我々が危惧した女同士の付き合いも良好に推移し、皆楽しみにしている。ボケも入っているのか、前年は家内の洋服汚れ事件、〇君のトイレ騒動等、毎回何かしらの珍事件が生じる旅行会でもある。

当初の方針を変更し、若いうち(?)は海外にしよう、ここ数年は海外となっており今年も海外である。今年の飲み会時、何時まで続けるかが話題となったものの、取り敢えず7歳になったら再検討することに決まった。仲間6人の年齢差が2歳あるが、誰の70歳の時は不明のままである。ただ最後の海外はハワイと決めており、全員楽しみにしている。ハワイ行きがずっと先になることを願いつつ、今年も仲間全員との旅行会を楽しみに待っている次第である。

(井野 今井 章文)

サークル活動奮戦記

佐倉市民カレッジに通いながら、他に趣味でスペイン語、中国語、フランス語三つの語学サークルに参加している。

いずれも月2回、計6回。スペイン語と中国語はネイティブの講師、フランス語は日本人で知識、海外経験、指導経験豊富な方に講師をお願いしている。

参加している生徒は語学によつて特徴がある。スペイン語では明るく楽しい老若男女、中国語では中高年中心の歴史に詳しい勉強家。フランス語ではセンスの良い女性が多い。スペイン語と中国語のサークルの世話人をしているが、参加者のレベル、目的がまちまちなので、まとめるのがなかなか難しい。入門者や欠席者の為に授業内容をブログにしたり、日本語があまり達者でないペルーの先生の通訳をやったりもする。

会員の中には、「歳なので憶えられない」「すぐに忘れる」「目が疲れる」と高齢者

特有の言い訳も出てくる。初回から「ボケ防止が参加目的」と宣言する人もいる。ボケ防止に効果があるかどうかは分からないが、何でもいいとにかく始める事だと思う。

確かに若い時ほど憶えられない。しかし世話人としては「二十代の人は2回以上、五十代の人は5回以上、七十代の人は7回以上読んだり、聴いたりすれば、問題なく憶えられますよ」なんて、自分でも出来ていないことを生意気にいっている。中には国際交流イベントに参加したり、短期語学留学に出かけたり、学んだ言語の実践の為、海外旅行に行かれる方もいる。色々な方に囲まれて、いい刺激を受け、楽しく「語学おたく」をしている。

(染井野 林 和義)

イカ、タコ

私は魚介類が好物だ。とりわけイカ、タコに目がない。イカの中でもアオリイカがキングだと思ふ。アミノ酸が多く美味。タコは活タコをゆがいて食するのが美味。ゆで加減が味を決める。

イカ、タコに興味があるのをご存じのように頭足類と呼ばれている。上から胴体と内臓があり、その下に頭、頭の下に足がある。何とも奇妙な形をしている。両者の違いは足の数だと思っていたが、どちらも足は8本である。イカのあと2本は足ではなく触角らしい。違いは胴体にヒレが付いているかどうかである。

イカもタコも突然変異でできたようだ。先祖は貝であったとのこと。先日、NHKのニュースで、タコが貝殻を付けたように見える生きた「アオリ貝」が、九州で捕れたと

の報道をやっていた。生きたアオリ貝は珍しいとのこと。これこそ貝とタコの間の生物だ！と興味深く見た。

貝は大きく移動することができない。だが貝殻を脱ぎ捨てた貝(?)が現れ、自由に海を泳ぎ始めた。

イカの内臓に透明な骨のような舟があるが、この舟が貝殻の名残らしい。骨のない筋肉のかたまりとなった彼らは、成長に制限がない。食欲旺盛で、食べただけ大きくなるそうだ。深海にいるらしい巨大な大イカ、大タコは何十メートルにもなり、クジラより大きいものがあるとのこと。

イカ、タコの食感魚とは明らかに違う。どちらかと言うと、やはり貝、アワビに近いと思いませんか？

(ユーカーリが丘 加藤 克俊)



8月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL043-485-1801

〒285-0025 佐倉市錦木町198-3

URL http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

さくら道

秋田の友人から山菜が届いた。やっとう手に入ったとの便りとともに。その中に初めて見る「ひでこ」が一把。「ひでこ」はシオデのこと。秋田特有の呼称と知る。シオデは山のアスパラともいわれ、若葉はおいしいと聞いてはいたが、食したことはない。旬の新タマネギと一緒に炒め、塩胡椒で味つけを試みた。苦味も灰汁もなく確かにおいしい。

数日後、今度は近所の友人

が信州産のウルイを持ってきてくれた。ウルイも野草。ギボウシの若葉。これは定番の酢味噌和えでいただく。軽いぬめりとしゃきつとした歯ざわり。鮮やかな萌黄色が美しい。淡白な味を堪能する。

大事な友が届けてくれた雪国からの贈り物。豊かな山の恵みに感謝。遅い春もなかなかいいものだ。

（松山 洋子）

あとがき

今月号も興味あるご投稿、有難うございました。

編集部一同、またのご投稿をお待ち致しております。

当部では、小紙を皆様の憩いの場として、さらに充実した内容作りを目指しております。それには何と申しませぬ、皆様からのご投稿が決めます。身近の明るい出来事や心に残る体験談、感動したこと、聞いて欲しい話題な

ど、ご年配者と若者相互の語らいの場として、どうぞご自由に。

ご投稿は、固有の商品名や社名、勧誘、宗教や政治活動に関すること等は避け、読者の方が気軽に楽しめるあなたご自身のユニークな作品がお奨めです。

投稿文が一度活字になると「よし、もう一度！」という気持ちで自然に湧いて来るから不思議ですよ。

（田中 修司）